



TITLE:

セアンスにおける災因論を通して みた霊媒の性格 ーシンガポール の寺廟の事例からー

AUTHOR(S):

根布, 厚子

CITATION:

根布, 厚子. セアンスにおける災因論を通してみた霊媒の性格 ーシンガポールの寺廟の事例からー. 人文學報 1995, 76: 275-303

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48451>

RIGHT:

セアンスにおける災因論を通してみた霊媒の性格

—— シンガポールの寺廟の事例から ——

根 布 厚 子

I	序	論
II	霊媒が語る災因	
III	セアンスの事例	
IV	考	察
V	結	論

I 序 論

本稿の目的は、シンガポールのある寺廟（以下「A廟」と表記）において定期的に行われる霊媒によるセアンス¹⁾に注目し、依頼者に説明される災因について詳察を行なうことによって、民衆宗教における霊媒やセアンスの性格を明らかにすることである。

調査は1991年11月から1993年12月までのシンガポール滞在のうち、1992年9月から1993年12月までの間連日A廟へ行き、セアンスのある日は霊媒の横でノートを取り、同時にセアンスのやりとりをテープに録音した。その後、ノートとテープの記録を照合し、セアンスの記録として完結な資料のみを対象にした。調査用言語は中国語であり、福建語も使用した。

I-1 問題の所在

霊媒の性格について、一般論ではこれまでにR.ファース [Firth] がポリネシアの事例 [Firth, 1970] を用いて、王の三分類のなかで述べているように、王が神聖となる方法には、神と同一視されるか神になるような融合・合体の場合、または人体が神体の化身となり、神は人間の容器が死滅しても存続し続けるような場合、あるいは人格が神格の一時的な容れ物になる場合がある。この第3番目の場合を霊媒として呼ぶことができるという。同様に、I. M. ルイスが霊媒を「精霊の乗り物 [ルイス, 1985: 58]」と解釈している。霊媒は超自然的存在が憑依している状態では、超自然的存在の語りを、形式化されない自由な語りとして行うために、社会秩序に対立する語りをする可能性をも持っている。そのため、「変革性」[佐々木, 1979: 12] を持つとみなす傾向があった。ファースやルイスにしたがって本稿では霊媒も、シャーマンの

一種²⁾として扱ってゆく [Firth, 1970, ルイス, 1985]。これまでの霊媒やシャーマンについての研究では、シャーマンの日常性に目を向けることなく、変革性や新たな運動との関わりという点から取り上げられることが多く、そういった目立つ部分を司祭や王との比較の中で論じてきたと言えよう。その変革性とは、ウェーバー以来のカリスマ論として論じられてきたのであった。つまり霊媒あるいはシャーマンの変革性についての問いとは、カリスマ³⁾即ち変革的であり、非日常的であるという図式の検討をも意味する。そこで本稿では、日常の文脈からこの問いの検討を行ないたい。今回特にセアンスに着目したのは、セアンスこそ霊媒の日常的活動に他ならないからである。なかでも災因論を取り上げたのは、セアンスにおいて、霊媒は何が災厄をもたらしたのか、何のせいであるとするのか、といった災因論を説明体系の中に展開しており、そこに既成の社会秩序に対する態度を見て取ることができるからである。

シンガポールの災因論については、これまでに M. トプレイ [Topley] が広東人の病気治療、災厄除去儀礼の研究のなかで述べてきている。もともと中国広東省の家庭や十字路で日常的に行われていたこれらの儀礼が、シンガポールでどのように実践されているのか詳述したものである。なかでも子どもの発達過程で現われる小児特有の疾病について、華人は生後2カ月から16歳までの間は、一生のうちで一番邪鬼に取りつかれやすい年齢であると考えられているために病気になる、という理解をしていることを明らかにした。この「過関 [kwoh kwaan]」という儀礼は生後1カ月、百日、1年といったいくつかの病気にかかり易いと考えられているピークに合わせて行われる。子どもの八字（生年月日時間から出した運勢）と暦を合わせて、その子どものかかり易い病気とその時期、また子どもにそういった災厄をもたらす邪鬼の同定を行って、病気を寄せつけないような、あるいは治すという目的で門を通す儀礼が行われる。ここでは人生の発達段階上の危機が、邪鬼による災因論とうまく整合的に解釈されている [Topley, 1951]。佐々木 [1978] の場合、寺廟でのセアンスで収集した事例を挙げて、依頼内容の分析をした上で、疾病を持つ者には悪霊や黒呪術に帰すことはせず、呪符と漢方薬の服用をすすめ、精神上的の危機を持つ者には、抜魔等の儀礼を行う傾向があるとして、災因に関わる考察を行っている。しかし、これらの先行研究から、セアンスにおける災因論の一般的傾向をつかむことは難しい。よって、本稿ではセアンスでの災因論について、災因とその対処方法、また依頼内容と災因という点から分析を行い、その性格を明らかにしたい。

そこでまず、対象となった寺廟の成立した経緯やA廟にかかわる霊媒について概観し、神像等の配置についてもふれる。またA廟のセアンスが具体的にどのようなものであるのか、そしてセアンスに訪れる依頼者や依頼内容にはどのような傾向が見られたのかを挙げる。Ⅱ章では、霊媒から語られる災因論を対象として、災因とその対処の仕方や依頼類型と災因との関わりについて検討を試みる。Ⅲ章では、大きくまとめた災因の分類に即して、セアンスでの霊媒と依頼者とのやりとりを列記し、個別の説明をつけ加える。これらをもとにⅣ章では、災因の特定

とその方法について、そして災因の特徴、霊媒の性格について考察を行ない、V章では結論を述べたい。

I - 2 対象寺廟

(1) 沿革

シンガポールで民衆宗教を信仰する人々は、その宗教の名を「^{バイセン}拝神」と呼ぶ。上座部仏教や大乘仏教、道教などが混淆した信仰ではあるが、そのいずれをも指しており、総称するしかない[Topley, 1951:120, Wee, 1976:171, Clammer, 1991:80, Heinze, 1993]。そしてこの拝神の信仰の中心として寺廟がある。

A廟の場合、国内北中部にある住宅密集地に位置する、独立した建物⁴⁾を持つ寺廟である。この寺廟の成員は理事会組織の他に、セアンスや年中行事の運営、実行を担う会員により構成されている。A廟の中心的神像である邢府大人は19世紀末頃に中国福建省南安より招来され、現在地にあったカンボン（集落）に安置された。それ以来、祠を建てられ廟付近のカンボンに住んでいた人々がまつてきたのであり、現在会員と呼ばれている人々は彼らの後裔である。1970年代後半からカンボンが解消され、方々のHDB（住宅開発局）フラットに分かれて住むようになってからも依然として「我々の廟」として集まって来ている。1983年には、それぞれ1km前後離れた場所にあったL廟とK廟がA廟のある場所に移され、3つ並んで改築されたが、理事会組織などは別々になっている。

セアンスに奉仕するために参加する霊媒の数は毎回不確定ではあるが、およそ2, 3人が来ている。A廟の霊媒の総数は12名であるが、各自が職業に就いているため、セアンスの開かれる夜も都合のつかない者が多い。廟の理事会以下、組織の成員は男性に限られ、霊媒もまた男性である。霊媒になる成巫過程に関して佐々木の報告[1979]があるが、A廟では巫病から霊媒になった事例はなかった。いずれも突然、超自然的存在から選ばれ、憑依状態となり、霊媒になっている。

(2) 超自然的存在

A廟に置かれている像（「^{キムセン}金身」）は全部で15である。三王爺の(1)邢府大人、(2)朱府大人、(3)李府大人、(4)大伯公。五宮軍將は旗（「^{リンキー}令旗」）だけ。さらに(5)楊元帥、(6)楊大使、(7)楊二帥、(8)楊三帥、(9)楊四帥、(10)楊五郎、(11)楊七帥。A廟の中にはこれら地上界の超自然的存在の像がある。さらに冥府（地下界）の祠堂である普渡壇（中元とも呼ぶ）が併設されており、そこには(12)大爺伯、(13)大二爺伯、(14)大三爺伯の像がある。また像はないが、16歳までに死んだ子どもの霊を世話すると言われる孩子公もこの普渡壇内部で信仰され、供物が捧げられる対象になっている。また、廟の外には玉皇上帝を拝む香炉とその壇が置かれている。天上界と地上界を結ぶ最高神として民衆から信仰を集めている玉皇上帝の場合、廟でも家庭で

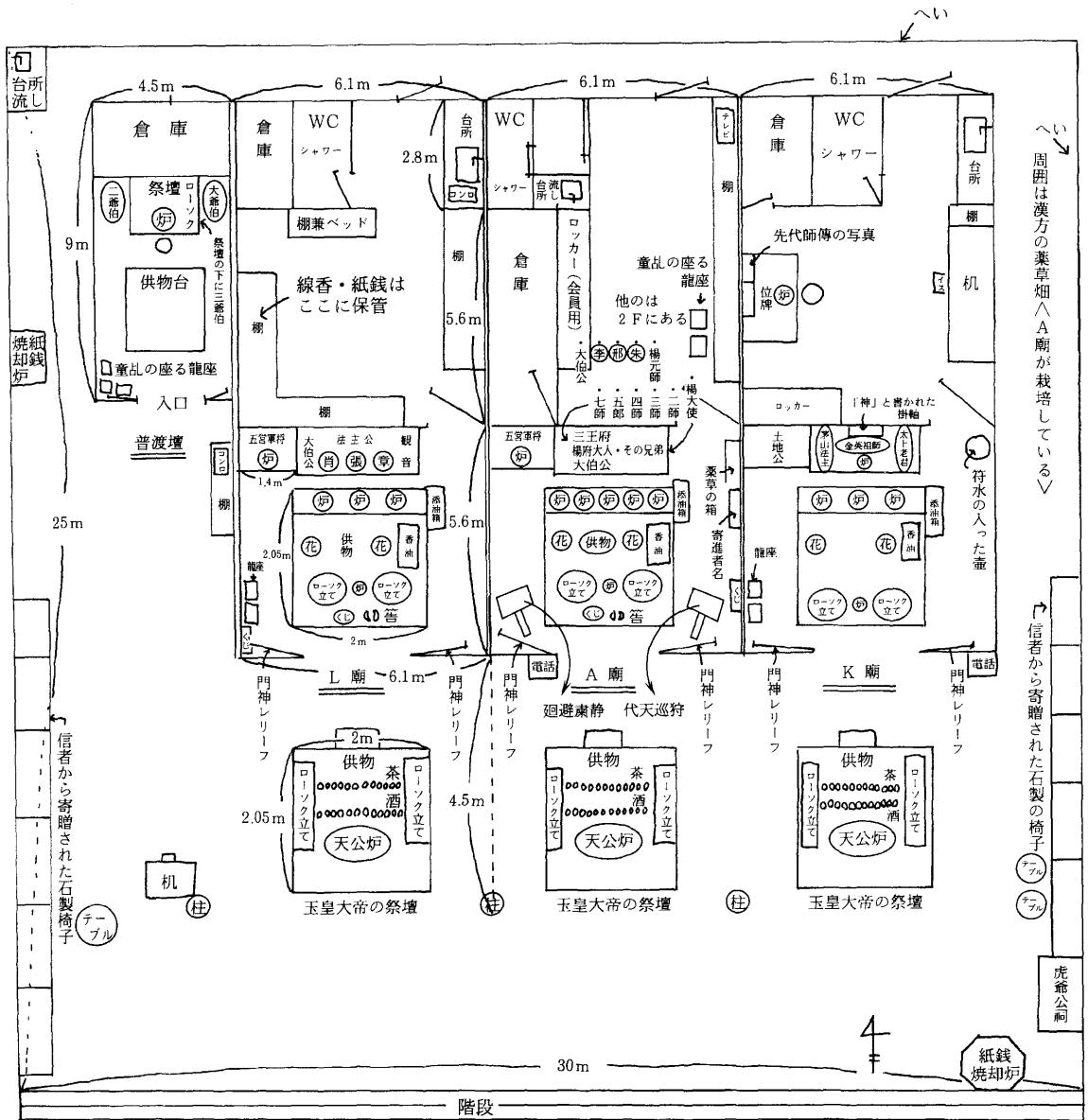


図1 寺廟敷地見取り図

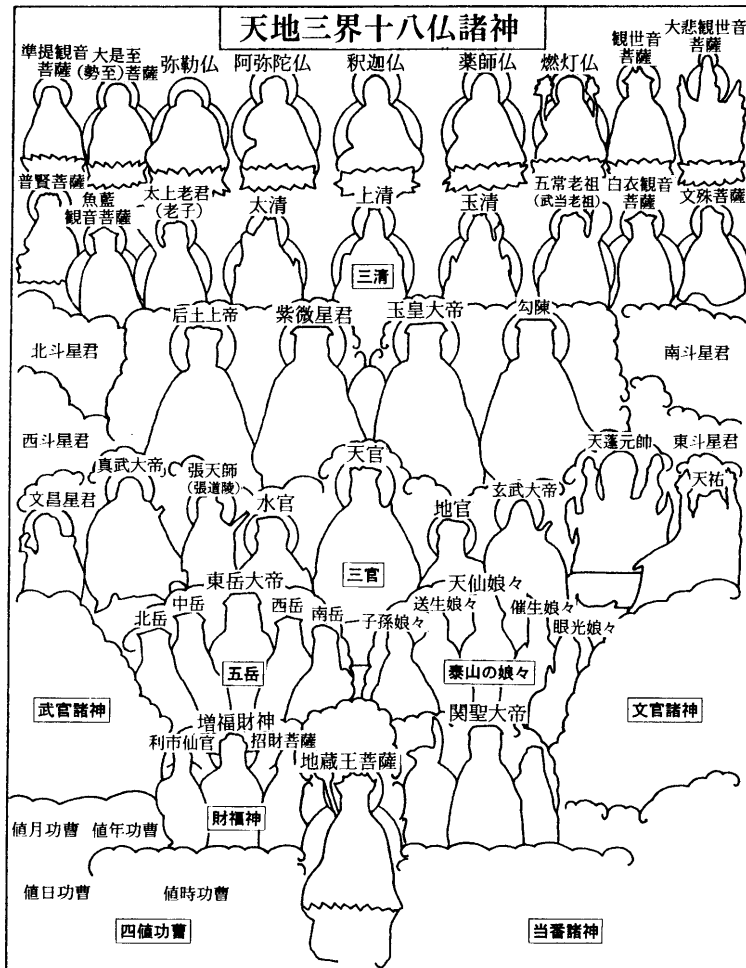


図2 天地三界十八仏諸神（澤田，1982：224）

も空に向かって宙吊りになった香炉や香油壺などしかなく、像は作られていない。（図1 参照）

廟で拝む（「^{バイバイ}拝拝」）順番も、まず玉皇上帝に香を焚き三跪九叩して拝み、次に廟の建物の中に入り、三王爺と大伯公、楊元帥とその兄弟を同じように拝み、その後、祭壇横にある五營軍將を拝む。廟を出て、普渡壇へ行き三つの像と像のない孩子公に対しても同様に拝む。人によってはL廟やK廟も含めた3つの廟すべてを拝む場合もある。シンガポール華人で、仏教徒の場合毎月農曆の一日と十五日には「齋」として肉食を絶ち、神仏を拝む日となっているため、その日に訪れた人々は3つの廟のすべてを拝むことが多い。

疫病神である王爺は全部で360あると言われている〔劉，1983〕が、A廟では3つである。大伯公は、財神として東南アジア全般に信仰を集めている。楊元帥とその兄弟はA廟の人々に

よると宋代の義士で、君主に忠誠を尽くしたため死後神格化されたと言われている⁵⁾。五営軍將は、廟の主たる神に仕える諸々の神という意味であり、「五」は五体ではなく、「多くの」といった意味合いで受け取られている。普渡壇は暗い地下の冥界と考えられているため、照明も殆どなく、昼夜を問わず薄暗い。ここには地獄の閻魔の前で死者が審判にかけられる際に、死者の生前の行いを閻魔に報告する役目を務めている大爺伯、大二爺伯、大三爺伯が像として置かれている。

中国民衆宗教の一般的な解釈では、仏教、道教、儒教の神々が混淆し、ハイアラーキーな官僚機構の組織を模した世界になっている[澤田, 1982]。(図2参照) 釈迦仏、阿弥陀仏などが天界の最高位にあり、道教上の最高神である三清(元始・靈宝・道德)を尊重しつつも、実質的には一般の人々と直接関わるべき地位にある玉皇がいたため、人々は天界と地上界を結ぶ玉皇を最高神として考えたのであろうという中野[1984]の解釈がある。そして、この下に地下界である冥界にいる超自然的存在が位置している。病気治療等でセアンスに参加するのは、地上界および冥界にいる超自然的存在であり、陰魂による災いなどに対しては冥界の超自然的存在が担当することになると考えられている。

I-3. セアンスについて

(1) 様 式

セアンスは現在もなおシンガポールの拝神の信仰を集める寺廟のうち、霊媒のいる寺廟の多くで実施されており、年中行事のある際に行われたり、またこのA廟のように定期的に夜間行われるものもある。

本論文の調査対象となったA廟での問神は、毎週二回夜8時ころから11時ころまで、複数の霊媒に超自然的存在が憑霊し、セアンスを行う。毎回約60人前後の依頼者が相談に訪れており、費用はすべて無料である。謝礼といったかたちで渡そうとする依頼者もいるが、それすらも受け取ることはない。霊媒も寺廟から給与等の報酬はなく、全くの奉仕である。

A廟の収益はさい銭または年中行事の際の寄付によるもので、月々のさい銭は平均1,000シンガポール・ドル(約7万円)前後であった。

問神では依頼者が依頼内容の当事者である場合もあれば、別の人が代わりに来ることもあった。病気の場合には、たいていが西洋医や中医(漢方医)のところで納得のゆく治療を受けられなかったために、廟へ依頼に来ることが多く見られた。まず依頼者は廟に一週間から数日前に依頼の順番を予約し、当日廟にいる依頼の受付係に依頼内容を話し、依頼書に記入してもらう。ここで名前と住所と年齢が尋ねられるが、住所は任意である。その後、順番札を持って廟の中に用意された椅子に座って待っていると、番号が呼び出され、依頼者は廟の手伝いの人に付き添われて、霊媒の所まで行く。霊媒に超自然的存在が憑依していることを理由に、依頼者

は霊媒と直接口を訊くことを止められており、霊媒の横に座って、彼の語る言葉を解説する卓頭^{トウ}が依頼の内容を伝える。その間、霊媒を拝んでいる依頼者は多い。霊媒は卓頭のそれに応答し、超自然的存在の言葉を語り、その都度卓頭が解説をする。直接対話は一応禁じられているが、話が複雑になれば、卓頭を介さず直接話をすることもある。必要な場合には漢方薬を処方し、符を書いて渡す。霊媒の横では一連のこれだけのことが行われ、あとの詳しい説明や家庭での儀礼の手順などは廟を出た所で依頼者に付き添っていた手伝いの人によって行われる。処方箋はどこの漢方薬店へ持って行ってもよく、それを帰宅後に煎じて飲むことになる。その後、症状の進展に応じて、廟の問神に何度か通ってくる依頼者もあり、霊媒の方からは「完治した」と宣言することはないため、本人が納得のゆくまで終わりにく続けられる。

(2) 依頼者と依頼内容

災因論を検討する前に、廟でのセアンスについての一般的傾向を理解するために、ここでは依頼者の年齢や依頼傾向についてまとめた。詳細は別稿〔根布, 1995〕を参照されたい。

1991年11月から1993年12月までの調査期間のうち、1993年2月9日から1993年6月29日までの5カ月分、575件のみを対象としている。依頼件数のうち依頼当事者が男性の事例は289件、女性の事例は286件であった。

依頼当事者の年齢は男性30歳代、女性40歳代が多かった。（図3、表1参照）依頼当事者の居住範囲はA廟のあるアンモキオ（Ang Mo Kio）に集中している以外は特に差はみられなかった。（図4、表2参照）依頼の内容にはどのようなものがあつたのか、項目に分類しその上で、病気、仕事、子ども、精神関連についてはグラフにした。男女ともに病気に関する依頼が多くみられた。（図5、表3、図6、表4参照）実際に本人が廟へ依頼に来る場合と代理人が来る場合があり、廟へ依頼に来た人々の性別分類では女性の方が圧倒的に多かった。（図7参照）代理で依頼に来た人々は、誰の代わりに廟へ来たのかについて見てみると、当事者と依頼者（来訪者）との続き柄の判った事例に限られるので数は少ないが、男性の場合には母や妻が、また女性の場合には母が来ていることがわかった。（表5、表6参照）

II 霊媒が語る災因

ここでは、セアンスにおいて依頼者からの訴えに対し、霊媒がどのような災因論を展開しているのか、また出された指示についてみてゆきたい。セアンスは依頼と災因と治療・対処の三つの構成要素から成り立っていると考えられており、ここでは災因と対処方法、依頼と災因について述べたい。

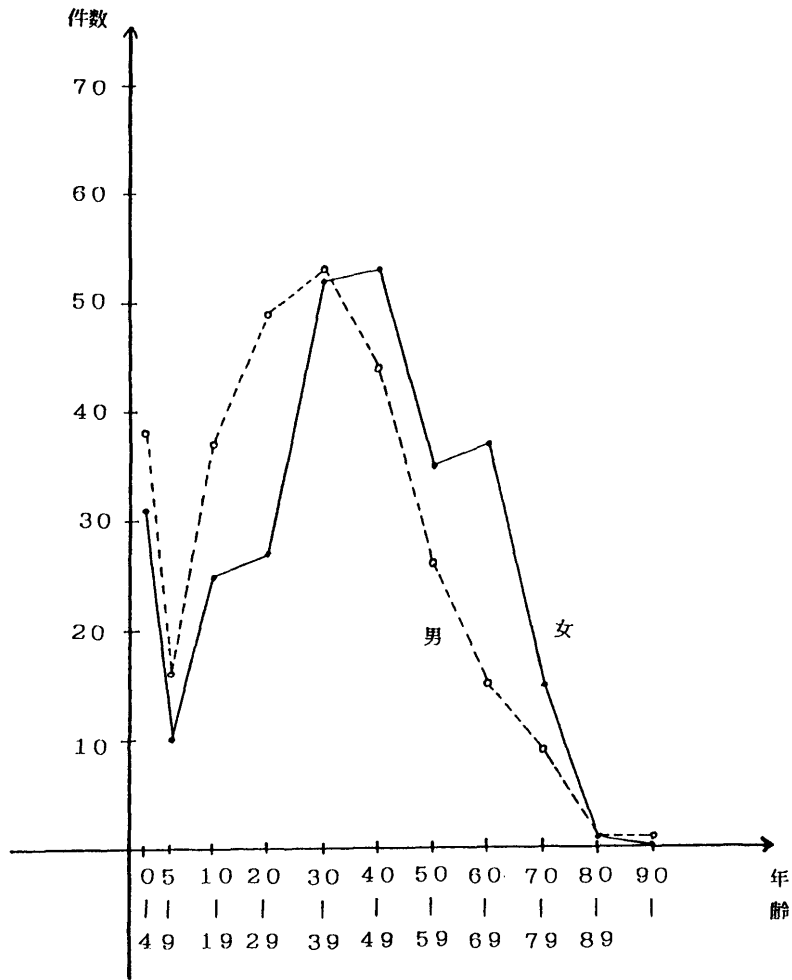
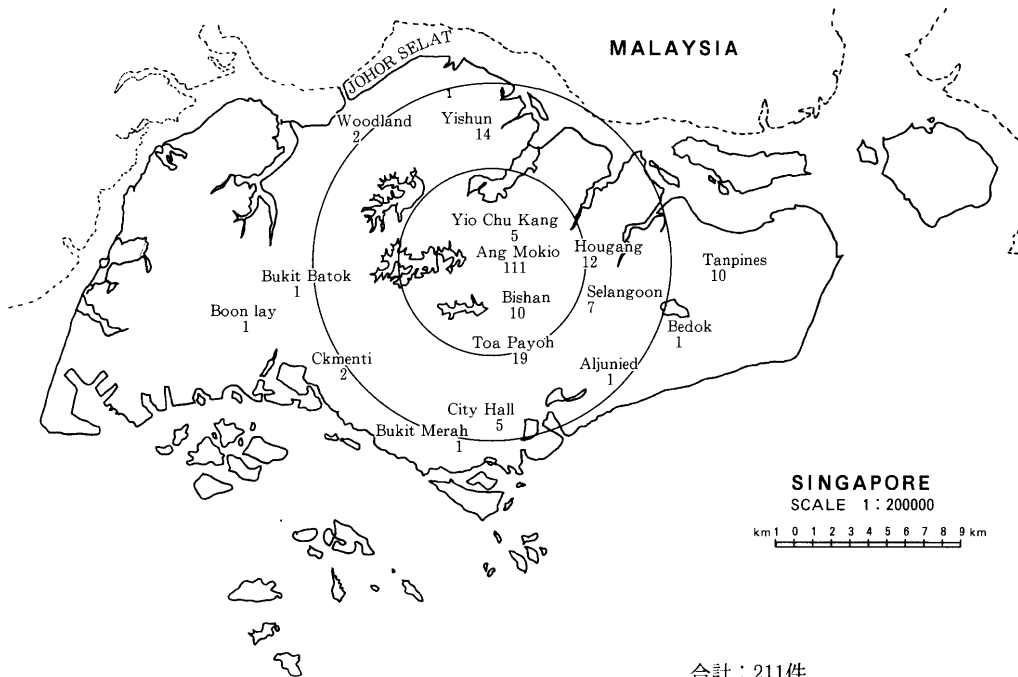


図3 1993年2月9日から6月29日までの5ヵ月分 性別・年齢：男女

表1 1993年2月9日から1993年6月29日までの5ヵ月分（575件）事例の性別と年齢

女：	年齢	件数	男：	年齢	件数
	0-4	31		0-4	38
	5-9	10		5-9	16
	10-19	25		10-19	37
	20-29	27		20-29	49
	30-39	52		30-39	53
	40-49	53		40-49	44
	50-59	35		50-59	26
	60-69	37		60-69	15
	70-79	15		70-79	9
	80-89	1		80-89	1
	90-	0		90-	1
合計		286	合計		289

セアンスにおける災因論を通してみた霊媒の性格（根布）



合計：211件

Batam Island & Indonesia：5

参考：Singapore Street Directory, Ministry of Law, 1991

図 4

表 2 地域別（1993年2月9日から1993年6月29日までのうち住所の判ったもの575件中211件）

地域名	件数
Ang Mo Kio	111
Toa Payoh	19
Yishun	14
Hougang	12
Bishan	10
Tampines	10
Selangoon	7
Yio Chu Kang	5
City Hall	5
Indonesia (Batam)	5
Holland Rd.	3
Woodland	2
Clementi	2
Sembawang	1
Bedok	1
Aljunied	1
Bukit Merah	1
Bukit Batok	1
Boon Lay	1
小計	211
不明	364
合計	575

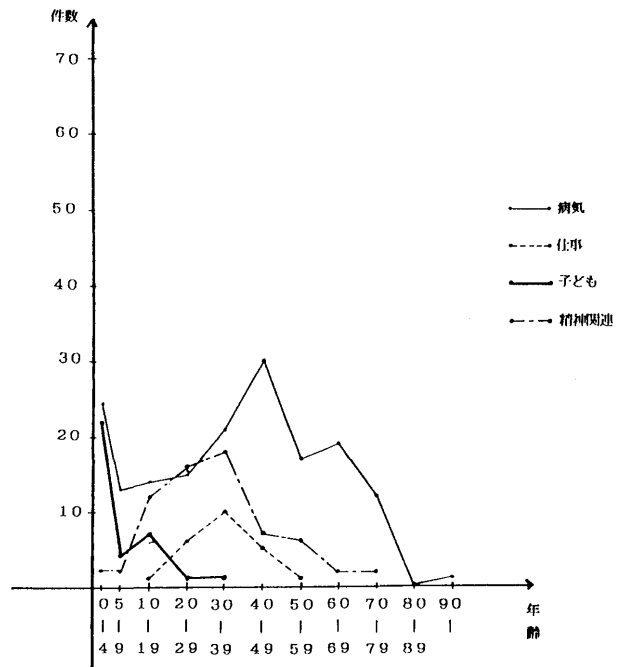


図 5 依頼内容項目：男性

表3 依頼内容分類：男 一つの訴えを1件とした

	(件数)
I 病気	
①発熱・下痢・脳溢血・耳なり・咳・糖尿病	77
②不眠	6
③おなかが張る	3
④食欲不振・吐く・ミルク飲まない	16
⑤だるい・力ない・めまい	35
⑥痛み・腰・背中・けが・交通事故	29
II 仕事	<u>166</u>
①転職	2
②失敗・トラブル・事業の前途・成功したい・仕事しない	21
III 子ども	<u>23</u>
①夜泣き	19
②昼間騒ぐ・泣く	5
③勉強しない	8
④名付け	1
⑤千児子の日取り	2
IV 精神関連	<u>35</u>
①性格・気質・人に逆らう・夜出歩く・飲酒・喧嘩好き・金銭感覚	24
②精神不安定・記憶がない・夢をよくみる・気がふさぐ・奇怪行動	20
③霊のさわり・交通事故のあった所でこけた	5
④運氣・運と壁の色・HDBのくじ	3
⑤家庭不和	10
⑥交際・二人の女性・浮気・悪い友人	4
⑦見合いがいつもうまく行かない	1
V 日取り	<u>67</u>
①神像安置・拾ってきた神像の処置	13
②改築日・引っ越し・帰国日	3
VI 符	<u>16</u>
①旅行・保身・大門	18
②手術成功	1
③兵役	12
VII その他	<u>31</u>
①家出	6
②窃盗	1

セアンスにおける災因論を通してみた霊媒の性格（根布）

表 4 依頼内容分類：女 一つの訴えを 1 件とした

	(件数)
I 病気	
①発熱・下痢・頭痛・できもの・胃痛・咳	105
②不眠	20
③婦人科系・産科系	9
④食欲不振・吐く	18
⑤だるい・力ない・めまい	35
⑥痛み・腰・目・足・けが	67
⑦しびれる・麻痺	10
II 仕事	<u>264</u>
①転職	2
②失敗・トラブル・投資の先行き・事業の前途・上司との相性	17
III 子ども	<u>19</u>
①夜泣き	27
②昼間騒ぐ・泣く	3
③勉強しない・テスト近い	6
④名付け	1
⑤干兒子	1
IV 精神関連	<u>38</u>
①性格・気質・言うことを聞かない・キョウダイ仲が悪い	9
②精神不安定・話しながらない・潔癖症・夢をよくみる・奇怪行動	15
③幽霊を見た・押さえつけられる	3
④運氣	6
⑤家庭不和	3
⑥交際・妻ある男性とのつきあい	1
V 日取り	<u>37</u>
①神像安置のため・神衣の着け替え	3
②法事	1
VI 符	<u>4</u>
①旅行・保身・大門・結婚式出席	22
②手術成功	1
VII その他	<u>23</u>
①邪術をかけられた	4
②お金を落とした	1
	<u>5</u>

人 文 学 報

表5 本人が来ていない事例数および実際に廟へ依頼に来た人数

女： 年齢	本人来ていない（件）女45人中（％）		来訪者（人） 女297人中（％）	
0-4	7	15.5	24	8.1
5-9	2	4.4	8	2.7
10-19	3	6.8	22	7.4
20-29	13	28.9	15	5.1
30-39	13	28.9	48	16.2
40-49	2	4.4	71	23.9
50-59	0	0.0	54	18.1
60-69	2	4.4	42	14.1
70-79	2	4.4	13	4.4
80-89	1	2.3	0	0.0
90-	0	0.0	0	0.0
合計	45	100.0	297	100.0

男： 年齢	本人来ていない（件）男92人中（％）		来訪者（人） 男210人中（％）	
0-4	12	13.0	26	12.3
5-9	3	3.3	13	6.2
10-19	14	15.2	23	11.0
20-29	24	26.1	26	12.3
30-39	17	18.4	39	18.6
40-49	8	8.7	37	17.6
50-59	8	8.7	25	11.9
60-69	3	3.3	13	6.2
70-79	3	3.3	6	2.9
80-89	0	0.0	1	0.5
90-	0	0.0	1	0.5
合計	92	100.0	210	100.0

セアンスにおける災因論を通して見た霊媒の性格（根布）

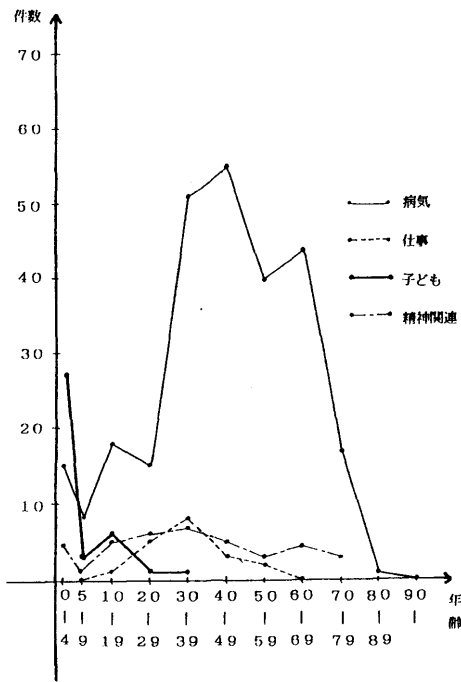


図6 依頼内容項目：女性

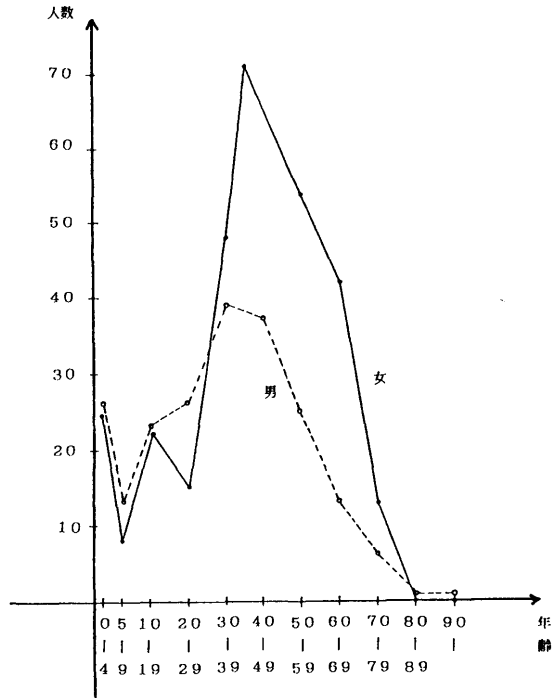


図7 実際に廟へ来た人数

表6 当事者の代わりに来た人（続き柄の判った事例のみ）

男	祖母	祖父	母	父	妻	娘	息子	キョウダイ	計	女	祖母	祖父	母	父	オバ	キョウダイ	計
0-5	2	1	2						5	0-5	2		1				3
6-9			2						2	6-9			1				1
10-19	1		5						6	10-19			1	1			2
20-29			6	5				1	12	20-29			7		1		8
30-39			3		3				6	30-39			4			1	5
40-49				1	4				5	40-49			1			1	2
50-59					6				6	50-59							0
60-69					2		1		3	60-69							0
70-79							1		1	70-79							0
80-89									0	80-89							0
90-									0	90-							0
計	3	1	18	6	15	0	2	1	46	計	2	0	15	1	1	2	21

II-1 災因とその対処方法

1993年2月9日から5月18日までのセアンスの事例250件について、霊媒からの語りのなかに災因となる文言を捜し、分類を行った。災因は大きく14に分類し、それに対応して講じられた方法を22に分けた。(表7参照) 災因の内容に関わらず、飲む符を渡している場合の多いことがわかる。体質による災因には漢方薬の処方が比較的多いともいえよう。また呪術的儀礼を方法として指示する場合も、災因の内容に偏ることがなく、全体的に散らばっている。符と漢方薬の処方に次いで多かったのは、食物制限であった。明言してはいないが災因として身体内が冷や熱に偏り、バランスを崩しているのも、疾病を引き起こした要因の一つであり、どのような食物が偏りを回復させるのか、依頼者と霊媒との間ですでに共通の知識として事前に蓄えられ、理解されているため、その方法として説得力をもっている。

次に挙げているのは、災因としてあげた14分類のなかでも、1つの項目が複数の災因に対応する場合、それらに含まれる災因をあげた。これら以外の分類項目はその内容と一対一対応している。

性 格——粗野な性格、何でも恐がる、注意が足りない、「驚嚇 [jing he]⁶⁾」

運 ——運氣, 縁

公 婆——公婆^{コンマー} (公媽)⁷⁾, 床母 (寢室の神)

体 質——虚弱体質, 胃が悪い, 疲れ, 消化不良, 心臓が弱っている, 高血圧, リュウマチ, 骨と筋肉が合っていない, 筋違い

精神不安——精神不安, 考えすぎ, 心中複雑

血氣不順——血氣不順, 五臓にわたり傷んでいる, 体内毒質

そ の 他——店を開いた場所, 異教徒, 間取り, 年が小さい, 友だち

災因として説明に登場した数を見ると、災因の説明がないものが約41%と高い比率を占めている。災因の説明が霊媒からなされなくても、依頼者はその指示を受容することができるということになるかもしれない。ただし、災因を言わない場合でも、依頼者との応答を見ると、依頼者と霊媒との共通の知識の上で理解可能な指示が出されている場合とその知識を共有しない場合に分かれることになる。この点に関しては後の章で考察したい。

災因14分類をさらに、なしとその他を「特にない」という項目に、性格、精神不安、体質、血氣、身体が熱/冷、運、貴氣を「当事者」に、天氣を「自然」に、そして公婆、陰魂、邪術を「超自然」、「その他」の5分類に、方法22分類を「薬処方」「符」「祭祀」「行動禁忌」「別の医者・廟」「食物制限」「その他」の7分類にまとめなおした。(表8参照) 公婆は当事者以外の超自然的存在であり、またそれは当事者が祭祀を行うのを怠っていたからであるとする説明もありうるが、ここでは公婆が災因として挙げられて、当事者の態度には言及しない限り「超自然」に分類した。運や貴氣は当事者が生まれながらに持っているもので、公婆や陰魂に対して

セアンスにおける災因論を通してみた霊媒の性格（根布）

表7 1993年2月9日から5月18日までの250件（1件の依頼について災因が複数であれば、両方に方法を数えた）

災因 方法	なし	性格	運	公婆 床母	陰魂	体質 怪我	精神 不安	天気	血気 不順	身体が 冷/熱	何でも ない	貴気	邪術	その他	計
漢方薬	31				2	29	2	7	5	4	1				81
飲む符	85	13	7	3	7	33	9	10	7	10	7	2	1	4	198
貼る符	2				1									1	4
保身符	8	2			1	1	1	1					1	1	16
洗う符	14	2	5	1	5	7	4				3		1	2	44
燃やす符	3			1	2	1									7
外用薬	15					5		2	4						26
十字路	1				2										3
叩謝	9	1	1	2	4	2	1	1	1	1	1	1			25
拝拜	26	3	4	3	3	6	1		3		2	2		7	60
婚葬ゲーム	2	1	2			2			1	1		1			10
冷水冷風	8				3	14	1	4		4					34
考えすぎ	1		1		1		2			1					6
妊婦喪中	4		1												5
夜外出	1					1									2
毛班医生										2					2
別の廟				1	1										2
西医	3					4		1	1	1					10
慎重世話	1					1		1						1	4
干兒子	1											1			2
食物制限	30	1			3	22		7	3	5		1			72
その他	40	6	5	2		14	3	3	1	5	1			1	81
計	285	29	26	13	35	142	24	37	26	34	15	8	3	17	694
(%)	41.1	4.2	3.7	1.9	5.0	20.5	3.5	5.3	3.7	4.9	2.2	1.2	0.4	2.4	100(%)

表 8

災因：特にない－「なし」「何でもない」

当事者－「性格」「精神不安」「体質」「血気」「身体が熱/冷」「運」「貴気」

自然－「天気」

超自然－「公婆」「陰魂」「邪術」

その他

災因 方法	特にない 件数 121件	当事者 100	自然 12	超自然 11	その他 11	計 255件	%
薬処方	47 (15.7%)	49 (17.0%)	9 (24.4%)	2 (3.9%)	0	107	15.4
符	122 (40.7)	104 (36.0)	11 (29.7)	24 (47.1)	8(47.1)	269	38.8
祭祀	39 (13.0)	27 (9.3)	1 (2.7)	14 (27.5)	7(41.2)	88	12.7
行動禁忌	16 (5.3)	33 (11.4)	4 (10.8)	4 (7.8)	0	57	8.2
別の医者・廟	3 (1.0)	8 (2.7)	1 (2.7)	2 (3.9)	0	14	2.0
食物制限	30 (10.0)	32 (11.1)	7 (18.9)	3 (5.9)	0	72	10.4
その他	43 (14.3)	36 (12.5)	4 (10.8)	2 (3.9)	2(11.7)	87	12.5
計	300 (100.0)	289 (100.0)	37(100.0)	51 (100.0)	17(100.0)	694	100.0

・ 1件の依頼に対する複数の災因を含む

行われるような儀礼では改めることができないため、「当事者」に付随するものとして分類した。これらを整理すると災因を当事者本人に帰する説明の多いことがわかった。「超自然」によるとされる災因に対しては、祭祀を行うよう指示している割合が高くなっている。

Ⅱ－2 依頼類型と災因

ここでは1993年2月9日から3月26日までの144件の事例のうち、日取りや符のみを貰いに來た事例を除いた129件が対象である。依頼類型は依頼者と依頼内容に関する報告のなかで行った分類をそのまま用いて、それに対して説明が行われている災因について分類を行った。

病気の依頼に対しては、当事者自身の体質や胃、腸などの疾患に災因があるとする傾向がある。また、災因を語らずにセアンスが行われている場合も、病気の依頼には多く見られる。

セアンスにおける災因論を通してみた霊媒の性格（根布）

表 9 依頼と災因の関係（1993年2月9日から3月26日までの
144件のうち日取り等を除く129件が対象）

依頼 災因	病気	仕事	子ども			精神	その他
			熱/咳	泣く	勉強		
なし	28	3	5	5	1	6	2
性格	1	0	0	4	4	0	2
精神不安	3	1	0	1	1	0	0
虚弱体質 胃等悪い	27	0	2	1	0	0	0
血気不順	3	0	0	0	0	0	0
身体冷熱	3	0	1	0	0	1	0
運・縁	1	1	0	1	0	1	1
公婆	0	0	0	1	0	0	0
陰魂	1	0	1	1	0	1	0
天気	4	0	2	0	0	1	0
貴気	0	0	0	2	0	0	0
その他	3	4	0	1	0	0	0

（依頼1件に対し複数の災因を説明したのは、病気の依頼に1件ある。）

（表 9 参照）ただし、全体として顕著な傾向は見られなかった。

Ⅲ セアンスの事例

以下では、セアンスにおいて霊媒と依頼者が災厄等をめぐってどのような相互行為を行ったのか、具体的な事例を挙げて説明を加えた。Ⅱ章でみたような災因の分類に沿って、「特にない」「当事者」「自然」「超自然」について個別の事例をいくつか挙げることにした。全体としてのまとめはⅣ章で行う。

Ⅲ－１ 特にない

▼事例１ 1993年6月22日：46歳女性。左足の甲が腫れて痛い。3週間にもなり、西洋医へ行っ
て注射をしてもらい薬を飲んで少しは良くなったが、まだ治っていない。サテー（マレー風
焼き鳥）を売り始めて二、三日でこんなことになった。

霊 媒（楊大使）：「手を出して。（依頼者の手首に棒をあててみる）長時間歩いたりしな
いように、立ち続けるのもいけません。守れないとすぐにだるくなります。以前も右
足で同じ事が起こっていますね。中医へ行って按摩をして貰いなさい。家の中の事は
問題ありません。別の問題です。薬を処方しましょう。少茴－1¢（以下薬名続く）。
霊符。」

（係が符と筆を渡す）

霊 符：「二枚は薬と一緒に飲みなさい。一枚は神水・中丹・玉皇丹・仙丹とともに飲みな
さい。油ものを食べてはいけません。暇があれば、老姜丹を焼酒に入れてそれで痛い
所を揉みなさい。」

ここでは霊媒は災因を述べていない。ただ、霊媒の持つ棒が依頼者の手首にあてられて、指
示が行われている。このように霊媒は病気をその場で治してみせることはしないが、霊媒の
「語り」の通りに実行すれば治るであろうという、依頼者との共通の理解にもとづいているた
め、この災因なき指示は受容されていると言えよう。

▼事例２ 1993年4月9日：39歳男性。今の仕事（営業促進）に不満を感じているので、自分
で仕事を始めようと思う。

霊 媒（邢府大人）：「今の仕事はどれくらいやっていますか。」

依頼者：「4カ月です。」

霊 媒：「何の仕事ですか。」

依頼者：「溶接の会社です。」

霊 媒：「何をしようと思うのですか。」

依頼者：「不動産の仕事をやろうと思います。」

霊 媒：「生辰（生年月日）は。」

依頼者：「（農曆）四月初一です。」

霊 媒：「今年前半はやってはいけません。やる時は、大伯公廟府へ行って、祭祀をしな
さい。」

小牲礼 1 付（供物の単位）

大久金 1 支

甘 茶

米 酒

その他 適量

これらを、大伯公とそれに仕える神々に対して奉りなさい。符1組は神水、玉丹、中丹、仙丹とともに飲みなさい。」

ここでは、依頼者の生まれた日「生辰」から運勢を判断して、仕事を始めるにあたっては、時期を見て、始める際に華人が財神と信じている大伯公を祭祀するよう指示している。「小牲礼」とは、鶏（ゆでたもの）1羽、するめ（海鮮の代表なら何でも）1束、豚肉（ゆでたもの）1塊の3つを1つの盆に合わせた、供物の最小単位。他には「中牲（1. 鶏。2. 鴨。3. するめ。4. 豚肉）」と「五牲（1. 豚頭と豚尻尾。2. 魚。3. 蟹。4. 鶏と鴨。5. するめ）」という供物の単位がある。

災因の説明は行われていないが、在職期間や職種を考慮に入れた上で、依頼者の運勢と併せて、呪術的祭祀をするように勧めており、その事と運とが関係のあることであろうという予測は依頼者にもできるであろう。

Ⅲ－2 当事者（性格・精神不安・体質・血気・身体冷熱・運・貴気）

▼事例3 1993年5月11日：46歳男性。右肩が「酸痛」（だるくて痛い）、2週間になる。

霊媒（朱府大人）：「手はリューマチにかかっています。以前に手に力をかけすぎたことが原因で起こっています。今は歳を取ってきたので、天気が悪いとすぐに痛むようになっているのです。薬を処方しましょう。

風尾	0.3¢（¢は薬の単位）
宋陳	0.2¢
桑根	2
豆鼓	1
葱芽頭	多少
射干	2¢
路党	半¢
衣	3¢
青艾	3株
好酒	多少

3碗の水で八分まで煮て、1、2日、3回服用しなさい。鶏肉は食べないように、冷水は飲まないように、蒸気は避けるように。夜には、薬酒を擦り込みなさい。ほかには、あまり大きな力を使わないように。霊符3組は薬を飲むときに。1組は神水、中丹、仙丹とともに飲みなさい。もう1組は好酒に混ぜて、「酸痛」のところをそれでさすりなさい。」

ここで霊媒が述べている災因は「力のかけすぎ」であり、またリュウマチのために「天気が悪いと影響がある」ことである。そこでこれらに対処するために「漢方薬の処方」と「符を飲むこと」を勧めている。また、「鶏肉を食べてはいけない」という考えは、華人が鶏肉は「冷」な食べ物であると認識しており、それを摂取することで体内が冷えると考えているからである。「冷水を飲まないように」と言ったのも同様に身体を冷やすからである。冷水、冷風や「冷」な食物の禁忌などは、実際の冷たさと体内の象徴的な冷たさの両方を示す民俗概念であり、文化固有の病いを作り出す説明モデルがここにあるといえる。A.クラインマンによると「冷」に対する恐れが強まり、病いを作っていると患者が理解するような説明モデルがあるとされている。例えば、「自分が陽を失いつつあり、そのために病気になりやすい虚弱状態に陥っている」[クラインマン, 1992:178-179] という信念である。

「蒸気を避けるように」と言ったのは、リュウマチが湿度の高い場合に発症しやすいからであろう。そして最後に、「符を酒に混ぜ、それで患部をさする」ように言っているが、これには、霊符のもつ威力が効果をあらわすという呪術的解釈が行われたからであろう。

▼事例4 1993年6月11日：33歳男性。本人来ていない。最近精神的に不安定、夜遅く帰ってくる。

霊 媒（楊大使）：「家の中が複雑である。『太歳（年の神）』の前へ行って頼みなさい。家に帰ったら麺線（素麺）を用意して、一家全員で食べなさい。家運がよくない。霊符3組は神水、中丹、中元丹、仙丹とともに飲みなさい。」

当事者が精神的に不安定なのは家の中の問題のせいであると説明している。家族全体に関わる「家運」がよくないので、それを助けるのは「太歳（年の神）」であるとしている。華人は素麺を長寿と幸福招来を意味する食品と考えているため、それを家族全員が食べる事で家運が改善される一因になると勧めたのであろう。精神的な問題を抱えている個人の回復には家族全員がその原因と治療に関わる必要があるという家族療法を似た対処の方法を取っている。

この事例の災因では、家の運について語られているが、なぜ家運が良くないのかについて依頼者は質問をしていない。家のなかがいろいろ複雑とは、具体的に散らかっている様子を指す場合もあるし、また親族関係に問題がある場合にも使われる。そのためここでは、あえて「家のなかのせい」である点に注目して、当事者に還元された説明と判断した。

▼事例5 1993年4月6日：38歳男性。10年以上も頭がすっきりせず、くらくらする。前に代わりに来てもらったが、今日は自分で来た。

霊 媒（楊大使）：「どれくらい経ちますか。」

依頼者：「18年間です。いい時もあるのですが、ひどい時もあります。」

霊 媒：「墓地へ行った時に何かよくないことを話して、それが「^{チョン}沖（逆らう、かち合う）」になっています。頭がそんなふうになる以前に、何か他のことが起こりましたか。」

依頼者：「父親と不和でした。」

霊 媒：「墓地でいい加減なことを話したことを覚えていませんか。」

依頼者：「覚えていません。」

霊 媒：「今、自分で中元に行って、香を三本持って、説明してきなさい。そして、そこで銀紙を燃やしなさい。約3年、5年、7年目には気をつけなさい。特別気をつけるように。弟子、跪きなさい。」

（楊大使は帰る。そのまま大爺伯が憑霊。霊媒は普渡へ移動する。）

（桌頭が香3本に火をつける。用意された水の入った金たらいの上で符を燃やし、水に溶かす。「男大童（竹の輪を台にしたひとがた）」の腹の辺りに筆で墨を1点。ふざまづいている依頼者の頭の上に「男大童」と香を立てる。符を1組書く。依頼者は拝んでいる。）

霊 媒（大爺伯）：「目の中にいつも1点黒い影が見えていますね。陰魂に出会って、連れて来ています。運のよい時にはそれはいいけれど、運が悪い時にはすぐにやってきて、あなたを訪ねます。墓地での葬式に参加してから生じたものです。さしあたり、最近は平安な方です。金1千（金紙1束の単位）をここで燃やせば大丈夫です。清香3支を持って、中元寺で拝んで、事の次第を説明してきなさい。霊符。陰魂と出会ってずいぶん経っている。時々ぼんやりするのは、その時陰魂が来ているからで、紙銭で追い払ったほうが…。明日の日暮れ時に十字路へ行って、陰魂を呼んで、17年前にしたことについて説明しなさい。

十字路儀礼で燃やすものは、

大玖金	1支（1束）
大 銀	1支
黄白銭	24
経 衣	適当
金	多少
銀	多少
菜 飯	7味（7種類）
男大童	1位（1人）

家の祖先には、

清 香	
金	1片（1枚）
貴人符（名を書いて）	
その他	適当

を燃やしなさい。符は叩謝（十字路儀礼）で1組。陰間水と1組。神水、中丹、仙丹、

八宝散とともに1組。砂12粒、五色花、紅花枝、と符2組はそれぞれ身体を洗いなさい。」

(「宝扇(大爺伯が持つうちわ)」で依頼者の後ろ半身を撫でる、前も同じ。)

霊媒の説明する災因は、「墓地で悪いことを言った」そして「陰魂と冲到して、連れて来ている」ということになる。霊媒の「陰魂を連れてきている」という文言から「超自然起因的」に分類することもできるが、墓地でいい加減な事を言って、陰魂に出会ったという因果関係を考えて「当事者」とした。これなども責任の所在をどこまで遡及するのか、その所在をどこで止めるべきであるのか断定しにくい例である。

陰魂という冥界の超自然的存在に対しては、普渡が助けると説明している。また日が落ちる頃に「十字路儀礼」を行うのは、陰魂が明るい世界には出て来ることができず、日が暮れる頃から出始め、そして十字路は特に陰魂と出会い易い所であると考えられているためである。ここでは符が多様な目的に使われている。

▼事例6 1993年5月18日：3歳男児。本人来ていない。夜も昼も泣き、食欲がない。ミルクも飲まなくなつて、2週間になる。

霊媒(楊大使)：「出生の日は。」

依頼者：「3月18日です。」

霊媒：「何の神を置いていますか。」

依頼者：「大伯公です。」

霊媒：「『驚^{チン}』ですね。公婆祖先のところへ連れて行って、その前で拝んで説明をしてきなさい。霊符。」

(符を3組書いた。)

霊媒：「神水、中丹、仙丹、公婆丹、驚風散とともに3組の符を飲ませなさい。紅花枝と神水で手と臉を洗いなさい。」

子どもの夜泣きでよくある説明は「驚」である。これは華人特有の民俗概念とでも言うべきもので、子どもが急に何かの音で恐がったり、驚いたり、発熱したりそれに付随する反応のすべてを含むのが「驚」であり、このことで魂が喪失したと考えられている。そこで公婆を拝むように指示している。霊媒の質問から、この依頼者の家には公婆が置かれていないことがわかるので、それが置いてあるところまで連れて行き拝むように言っている。霊媒が災因を「驚」であると言うだけで、依頼者との間に共通の理解が成立し、その説明を受容し、公婆に助けて貰うことに同意している。

Ⅲ-3 自然

▼事例7：1993年5月14日 4歳女児。発熱があり、一度下がったがまた高くなった。

霊 媒（大爺伯）：「風も気温も熱いからだ。冷、熱のものをすべて食べないように。医者にみせたか。」

依頼者：「はい。」

霊 媒：「ビーフンは食べてはいけない。清淡なものを食べるように。鶏肉もいけない。あれこれ食べないように。鶏肉はだめです。特に咳やくしゃみをしている人には近づかないように。身体が弱っていますから。」

依頼者：「どれくらいで治りますか。」

霊 媒：「あなた方がどのように面倒をみるかによります。ゆっくり治るでしょう。」

シンガポールは赤道1度に位置し、乾季のうちでも4・5月は特に暑くなるため、このような災因が語られることもある。清淡な食物は冷でも熱でもないと考えられており、この災因の場合に適している。病気の当事者がいつ、どのように回復するのかはすべて依頼人の看護次第という説明が行われている。依頼人らはすでに廟へ来る前に、当事者が疾病を発病するに到った因果連関の予測をしてきており、霊媒との相互行為を通して、それを確信するに過ぎないといえよう。

Ⅲ－4 超 自 然

▼事例8 1993年5月14日：36歳女性。葬式に行き、帰ってきてから力が入らず、やる気がない。目が上につり上がり、精神的に不安定。

霊 媒（大爺伯）：「ひざまづきなさい。物を見るとき目が霞みますか。」

依頼者：「いいえ。」

霊 媒：「陰物（鬼）と一緒に付いて来っています。左目はよけいひどいです。符水を飲むときに、それをすこし取って目を洗いなさい。あれこれ貼ったりしてはいけません。今はすこしましですか。菜飯と金銀紙と生卵を使って供養をしなさい。霊符を用いて、身の前後七下（7回ずつ、なでるまねをする）しなさい。他人にやってもらうのではなく、自分でやりなさい。指示したとおりにしなければ、だんだん症状は悪くなります。霊符、陰陽水、中丹、仙丹、紅花枝で顔を洗いなさい。夜はよけいなことは考えないように。拝めば後はなにも起こらなくなりますよ。」

ここでは葬式に参列して、陰物を連れて帰ってきたことが原因として語られている。そこで、目の症状には薬を処方するのではなく、儀礼をするよう指示している。これは陰物を供養する目的で行われるもので、自宅の前などで行われるのが普通である。「神水」が地上より上の超自然的存在の祀られている壇に置いてある水に対して、「陰陽水」は冥界の超自然的存在が祀られている普渡に置いてある水のことである。冥界の超自然的存在に関係する水を用いて、顔を洗うように言っている。

▼事例9 1993年6月29日：43歳女性。身体の具合が何となく悪い。特に胃の具合がよくない。

霊媒（楊四帥）：「公婆（祖先の位牌）は？」

依頼者：「ありません。」

霊媒：「霊符はコーヒーに（溶かして）使いなさい。天公（玉皇上帝）に向かって助けてくれるように拜んできなさい。」

依頼者：「保身の符を下さい。」

霊媒：「公婆が（このことを）やっています。何が起こったのか、中元寺へ行って説明しきなさい。（農曆の）月末の金曜日にもう一度来て、指示を受けなさい。家の中の問題が大変複雑なことになっています。」

依頼者：「そうです、一番上の兄が癌で最近死んだところです。」

霊媒はさらに符を書いた。

霊媒：「これは門外で燃やしなさい。」

ここでは、依頼者以外の誰も知り得ないことに霊媒が触れ、依頼者がその「家庭内の問題」について思いあたって納得している。このような、一見、超自然的な力を霊媒が発揮することも依頼者が霊媒からの指示を受容する契機になっていると言えよう。

霊媒の語りから災因を分類するように試みたが、必ずしも明確な分類ができたわけではなかった。その理由として、まず何を災厄の原因とするのか、それを霊媒や依頼者からの文言だけで断定することが難しかったと言えよう。災因についての説明がある場合でも、事例4のように家族全員の態度を改めさせるようであったり、事例5のように墓地でいい加減なことを話した当事者を諷めるものであったり、災因が当事者に向けられている事例がいくつか見出された。

以上の二点についてさらに次章で詳しく論じ、最後に本論の主題である霊媒の性格へと論を進めて行きたい。

IV 考 察

本章ではまずセッションにおける災因の語り口を通して、災因を特定することについて、そして二番目には災因の特徴について、三番目には霊媒の性格について従来の先行研究を検討しながら考察を行いたい。

災因論として詳細な報告を行っているのはケニア・テソ族の研究を行った長島〔1987〕である。長島は災因論を、実際にすでに発生したか、あるいは理論的に想定しうる災いを受けた状態（マイナスの状態）をいかに元に戻す（ゼロにする）かについての理論と行動の体系であるとしている。以下で長島の災因の分類⁸⁾を検討したい。

長島は死霊、巫霊、邪術、呪詛、タブー侵犯〔1987:388〕などといった項目を霊媒の語りの

中から取り上げている。彼はさらに分類した項目を5つにまとめているが、そこでもさらに診断と災因を等価なレベルで捉え、並列的に扱っている。

たとえば、それらは(1)特定のタブーを破ったこと、(2)エタレ儀礼⁹⁾が行われていないこと、(3)特定の「病名」を持つ病気、(4)「体内損傷」として一括できる病因群、(5)邪視である。しかし、診断し命名する(3)や(4)を災因とすることと、現在ある災いの状態を引き起こした責任を捜しあてる(1)や(2)とは区別する必要があるだろう。

ただし、テソの場合はシンガポールと異なり、「運命観」の欠如した社会であり、個人の一生が生まれながらに定められているとか、個々の災厄は災因との個別な関係に還元され、その災因を除去することで、個人は「理想状態」に戻ることができる[長島, 1987:412]と述べられているように、災因と診断が不可分に結びついているのかもしれない。

A廟のセアンスに立ち帰って考えるならば、依頼者が現在の症状をどのように納得するのか、つまりそれは診断し命名すること（例えば「リウマチである」と霊媒が言うこと）であるのか、それとも症状を引き起こしたのは何であったのかと責任所在を問うことであるのか、その区別は難しい。例えば事例6のように、霊媒が子どもの夜泣きの収まらないのを「驚」であると診断しているが、命名することでそれ以上の責任を遡及することは行われていない。「驚」を引き起こしたのは何か。見知らぬ人に出会って恐怖心を抱いたためか、もしそうであるならば、直接出会ったのは誰であったのか、といったように原因は際限なく遡及され、結局あいまいなままになってしまう。

しかし、今回はそれをあえて区別することによって「災因の説明のないままに、処方が行われている」といった責任主体を問わない傾向を分析的に導き出すことができた。

もう少し詳しく語りに着目し、霊媒がセアンスで行っていることを大別すると次の3つになった。(1)症状を診断する。(事例6・7) (2)症状を診断し、災因について語る。(事例3・8) (3)症状を診断し、災因について語り、その責任主体に言及する。(事例5・9) しかし、これらのなかでの災因の語られ方が問われなければならない。事例1を見てみると、依頼内容が申し立てられたあとすぐに指示を出しているが、指示の内容は依頼者が災因を幾通りにも推測できる可能性のある指示となっている。「長時間歩くな」「以前にも右足で起こっている」「家の中の問題ではない。別の問題である。」といったように、個々の指示内容の因果関係は語られていないため、災因の推測は可能であるが、そのどれであるかは不明なのである。しかし、依頼者はこれら個別の指示のなかから、納得する部分を切りとって理解しているのであろうし、その意味で分析者にとって「災因がない」と分類しようとも、彼らにとっては明確に災因が存在することになるのであろう。つまり、災因を文言として明言化しない、あるいはそうする必要がないのであり、現実にはA廟では災因がないとされる事例が多かったが、解釈は幾通りにもなるといえよう。しかし、災因を語る場合でも語らない場合でも、それをどの程度で止めるのか

が問われるべきであって、単なる項目の羅列であってはならない。災因を語らない場合、そこに霊媒と依頼者との間に、語られなかったことに対する共通の理解、知識があると考えられるし、また超自然的動作主体について言及したとしても、その動作を誘導した責任主体は別にあるかもしれない、それをあえて問うていない点をこそ検討するべきであろう。

以上のことから、災因は明言化されていなくても、依頼者にとってはそれで災因が語られていると受けとられる可能性があり、一元的に断定することは避けられなければならない。

第2に、災因の特徴は難しいが、あえてその性格を明らかにするならば、災因は当事者本人にかえされる性質を持っているということである。そのように霊媒が言っていない場合でも、そう思わせる事例が多い。例えば事例1のように、災因を特に語っていない場合でも、「長時間立ち続けたせい」というのは、当事者の責任と受け取ることも可能であるし、事例8にしても葬式に参列した人は他にいたにもかかわらず、この当事者一人に陰魂がついてきたことを指摘することで、彼女が陰魂を供養する儀礼の執行者となっている。責任を葬儀主催者とみなすことも可能であるにも関わらず、彼女に儀礼を実施するように指示することで、やはり災因は当事者に還元されているとみなすこともできる。

さらに、災因を他人や社会に帰する事例はみられなかった点が挙げられる。邪術の事例は災因を他人に求める明らかな例ではあるが、その原因のすべてが他人から発したと霊媒が指摘しているわけではない。他人に由来する災厄であったとしても、その由来となった人物を直接責める具体的な方法は取らず、邪術をかけられたと訴えている当事者に、何らかの処方を与えるに過ぎないため、消極的な態度でしか対応していない。

最後に霊媒の性格について考えたい。霊媒の指摘する災因は、当事者に責を負わせるものであり、病気や災厄に悩む人々に既成の社会を批判する余地を与えるものではないことがわかった。それは霊媒のセアンスにおける役割である。また霊媒がこの寺廟でセアンスに奉仕し、寺廟の社会的な責任や役割を担う以上は、現状を肯定しない、災因を当事者以外のものに求めることはできないという点を指摘しておかねばならない。ハインゼ [Heinze] も指摘しているように、「拝神」は近年ではかつて指摘されたような社会的に中下層の人々によって支持されるのではなく、むしろ広くその必要性が認められるようになっており [Heinze, 1982, 1993]、より社会順応的な性格が強まったと解釈できるのではないだろうか。その背景にはこの信仰が歴史的にエリートにより再解釈され、洗練されてきたことが考えられるであろう、またその一方では民衆が自分たちの信仰をエリートのパトロネージを通して正統性を確立し、エリートがそれを利用してきたという弁証法的過程を認識しておかねばならない。その結果、社会の規範に従属する宗教として生き残り続けてきたのである。そして、霊媒はセアンスとそれを行う寺廟の存続のために、自ずとその限界をみずからに課しているといえよう。

V 結 論

災因論に関してはこれまでの研究方法を用いて検討を試みたが、何を災因とし、それに対しどのような対処方法がとられているのかという体系的な検討のほかに、遡及すれば際限のない災因をどこにとどめるのか、この点について従来の研究では問われることがなかったことがわかった。災因には、明らかに当事者である場合、原因を遡及して行けば、当事者に当たる場合、いくつかの段階を辿れば遠因として当事者に該当する場合に分かれることがわかったが、災因を分析する上で断定することは難しい。むしろ、語りの中で災因がいかに追究されているか、またはされてないのか、という点に注目すべき意義があった。

例外的に、邪術など他人に原因を求める場合があったが、それも詳細に見て行くと必ずしも外に災因があるとは特定できず、当事者に返す場合が圧倒的に多かったということができよう。その意味で災因論は自己の行為・責任を問う自制的なまなざしを植えつけているのである。

従来は変革的な役割を負う者として霊媒が位置付けられてきたが、セアンスでは、むしろ既成の社会的規範の中へ戻すことを主眼としており、変革的ではありえなかった。従来の霊媒（およびシャーマン）に対する考察では、この日常性への考慮が欠落していたのではないだろうか。以上のことから、本稿ではシンガポールの霊媒の性格をセアンスにおける災因から明らかにしたが、同じ視点から、冒頭でも示したように、変革的であるとされてきた諸事例についても再考すべきであろう。

今後は、これまで司祭との関係で霊媒が論じられることが多かったことを踏えて、道士（司祭としての役目を負う）と比較することで、霊媒の性格を考えたい。

（謝 辞）

本稿の作成に当たって、草稿の段階では1994年12月5日（月）に京都大学人文科学研究所において行われた共同研究「主体・自己・情動構築の文化的特質」班（班長：田中雅一助教授）の例会で「シンガポールのシャーマニズム」として発表する機会を与えられた。同例会において貴重なご意見、ご指導をくださった参加者各位に心より感謝の意を表します。

- 1) séance は巫儀や降霊術会などの訳もあるが、内容は霊媒が超自然的存在を憑依させ、病気治療や災厄などの悩みを解決するように相談を受ける会を意味し、ここではそのままセアンスと呼ぶ事にした。
- 2) シャーマンを治療者として捉えることもある〔池田, 1992 : 158-161〕。
- 3) カリスマについてはウェーバーのカリスマ論を援用しながらまとめた脇本〔1979〕の定義がここでは有効であろう。1. カリスマとは、ある人物に宿っているとみなされる特殊な非日常的な資質

をさす概念である。2. この資質は、超自然的、超人間的、非日常的な、人並外れた特殊な力として発揮されるので、そのカリスマの指導者の例として、北欧神話に登場するベルゼルガーのような軍事的英雄、アテナイのクレオンのような政治的デマゴーグといった非宗教的カリスマと、呪術師、シャーマン^(ママ)、預言者、救世主といった宗教の世界におけるカリスマの指導者がいる。ここでは憑霊させ治療するシャーマンと、霊威（カリスマ）を持つ者としての霊媒を同様の意味で用いた。

- 4) 1970年代後半から始まった都市開発に伴って、多くの寺廟も統廃合を強いられた。そこでA廟のように独立した建物をもつ廟ではなく、HDB（住宅開発公社）フラットの中の一部屋に像を置いて存続させる寺廟もあった。また、1970年代以前から寺廟を持っていたのではない、新興のカルト集団もHDBフラット内に活動拠点を置いている場合がある。
- 5) 中国南部では「楊公」信仰があるが、それとの関連は明らかになっていない。
- 6) 驚いたり、恐れたりする出来事をきっかけに、たびたび熱を出したり咳をしたりすることになる。驚いた際に魂を落としたからと解釈されることが多い。
- 7) 祖父母を指す場合[Freedman, 1957:219]もあるが、夫方の母親のみや祖先を総称して指すこともあった。
- 8) 災因の分類は上田[1990]も行っているが、長島と類似の問題が残されている。また、問題解決に向けてどのような説明が行われているのか、その語りに注目した論文では、浜本[1993]がある。
- 9) テソにおいて、婚入してきた嫁に課される一組の禁忌で、レイヨウ類や植物に関わる各父系外婚単位が守っている固有の禁忌と、すべての嫁が守らなければならない家畜の内臓と骨を食べる事の禁止といった一般的な禁忌がある[長島, 1987:371]。こうした禁忌を犯した時に行うべき儀礼をエタレ儀礼という。

引用文献

- Clammer, J. 1991. *The Sociology of Singapore Religion: Studies in Christianity and Chinese Culture*, Singapore: Chopmen Publishers.
- Elliott, A. J. A. 1990(1955). *Chinese Spirit-Medium Cults in Singapore*, London: The Athlone Press.
- Firth, R. 1970. *Rank and Religion in Tikopia: A Study in Polynesian Paganism and Conversion to Christianity*, London: George Allen & Unwin.
- Freedman, M. 1957. *Chinese Family and Marriage in Singapore*, London: Her Majesty's Stationery Office.
- 浜本満. 1993. 「ドゥルマの占いにおける説明のモード」『民族学研究』58(1): 1-28.
- Heinze, Ruth-Inge. 1982. *Tham Khwan, How to Contain the Essence of Life*, Singapore: Singapore University Press.
- . 1993. The Dynamics of Chinese Religion: A Recent Case of Spirit Possession in Singapore, *In Chinese Beliefs and Practices in South-east Asia*, edited by Cheu Hock Tong, Malaysia: Pelanduk Publications. pp. 187-197.
- 池田光穂. 1992. 「シャーマン」(医療人類学研究会編)『文化現象としての医療——「医と時代」を読み解くキーワード集』メディカ出版. pp. 158-161.
- クラインマン, A. 1992. 『臨床人類学——文化のなかの病者と治療者——』大橋, 遠山, 作道, 川村訳, 弘文堂
- ライス, I. M. 1985. 『エクスタシーの人類学——憑依とシャーマニズム』平沼孝之訳, 法政大学出版

局

- 劉枝萬. 1983. 『臺灣民間信仰論集』 台北市：聯經出版事業公司
- 長島信弘. 1987. 『死と病いの民族誌』 岩波書店
- 中野美代子. 1984. 『西遊記の秘密——タオと煉丹術のシンボリズム』 福武書店
- 根布厚子. 1995. 「シンガポール中国寺廟の問神——依頼者と依頼内容をめぐって——」『東南アジア・歴史と文化』 24（東南アジア史学会編）印刷中
- 佐々木宏幹. 1974. 『シャーマニズムの人類学』 弘文堂
- . 1978. 「シンガポールにおける童乩（Tang-ki）の依頼者と依頼内容について」『駒沢大学・文化』 4:1-33
- . 1979 『人間と宗教のあいだ』, 耕土社
- 沢田瑞穂. 1982. 『中国の民間信仰』 工作社
- Topley, M. 1951. "Some Occasional Rites Performed by the Singapore Cantonese", *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, 24 (156): 120-144
- 上田紀行. 1990. 「伝統的治療儀礼の患者像とその変化——スリランカ南部の祓霊儀礼の現代性——」『民族学研究』 55 (3): 269-295.
- Wee, V. 1976. " 'Buddhism' in Singapore", In *Singapore: Society in Transition*, edited by R. Hassan., Kuala Lumpur: Oxford University Press, pp. 155-204
- 脇本平也. 1979. 「カリスマ論の諸局面」『現代宗教』 1: 2-15, 春秋社